

選者 川口孤舟

出席者 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵 佐藤ただしげ

豊田ゆたか 西澤國護 長谷見びん 古川百合子

投句・選句

今井紀久男 熊谷くにお 小早健介 朱牟田恵洲 高橋康敏 田島正己

土谷堂哉 中川雅夫 福島正明 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也

山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 伊賀山そらお 梅崎くすを 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章

~~~~~

《互選句》○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

十点 歳とへば手袋とつて指を出す とみ子 (孝・恵・康・○堂・雅・隆・昇・規・三・天)

老の賀の小さき洒落冬帽子 盛雄 (紀・くす・と・龍・清・己・堂・ゆ・雅・允)

九点 点となる鳥影染めて寒落暉 孤舟 (くす・五・と・康・己・び・允・け・○三)

◎寒析や顎まで浸かる仕舞風呂 康敏 (くす・孤・五・く・恵・清・○允・昇・盛)

八点 初釜やなかなか伸びぬ畳み皺 五郎太 (紀・と・恵・康・己・○正・啓・亜)

◎能登の海荒れて元旦暮れゆけり びん (○そ・孤・く・ゆ・○龍・國・○昇・規)

七点 つくばひの水の細さやひめつばき 孤舟 (孝・恵・康・雅・規・亜・け)

六点 天金の頁ぱりつと初日記 とみ子 (健・く・千・○孝・○啓・三)

初芝居はねて老舗の酒で締む 千恵 (紀・孤・く・ゆ・允・正)

地異非情終末思ふ三が日 びん (紀・そ・健・正・百・亜)

◎初夢や静ひのなき星に住む 昇 (孤・と・び・正・啓・亜)

あれやこれや越せぬ坂あり寝正月 盛雄 (くす・孝・ゆ・隆・び・百)

五点 リハビリの湯舟に浸かり初日富士 紀久男 (忠・と・び・允・盛)

コントレイル

燃ゆるごと結露の筋や冬夕焼 啓子 (紀・○健・孝・己・昇)

四点 月面に兎は居たか骨正月 健介 (五・○と・千・啓)

蓮根に飾り包丁大みそか 千恵 (恵・清・け・天)

深鍋に煮込むボルシチ雪の夜 康敏 (恵・昇・亜・天)

我が生きる意味を問いつつ初風呂に ゆたか (紀・國・隆・正)

初富士の龍神のごと海に立つ 昇 (そ・忠・五・け)

山道の地藏の頭残る雪 国護 (千・た・清・雅)

津波跡廃市を覆ふ雪の空 びん (五・己・堂・隆)

去年今年棒に残りし深き痕 百合子 (康・隆・啓・盛)

三点

雑煮食う妻の味に慣れ五十年

忠彦

(紀・國・三)

山茶花の零れ水輪の二つ三つ

孤舟

(く・允・三)

◎年の豆嚙みながら読む鬼平帳

とみ子

(孤・啓・三)

浅草から巢立つ若手の初芝居

ただしげ

(紀・忠・天)

凧上げる子等を見かけぬ野原かな

全

(健・雅・百)

子も親も皆ちやんちやんこ昭和かな

正己

(紀・堂・百)

大吟醸残りは爛に五日かな

堂哉

(紀・〇くす・健)

村恋し地藏菩薩の赤頭巾

びん

(龍・ゆ・規)

元旦や若き雌鶏初たまご

百合子

(清・規・〇盛)

◎初寄席や積る憂きこと忘れつつ

盛雄

(そ・紀・孤)

(桂米朝一門落語会)

二点

元旦の大地震(おおなる)津波震撼す

紀久男

(忠・雅)

お目出とう云へぬ正月なると事故

忠彦

(千・ゆ)

八代さん悼み熱燭鯛噛む

全

(く・正)

木蓮の冬芽ふくらむ開基廟

くにお

(た・百)

初筑波万葉の歌碑かがよへり

全

(〇己・亜)

花びら餅「良いお年を」と渡さるる

千恵

(紀・天)

ひとり鍋四つ切白菜もてあます

恵洲

(くす・そ)

◎初日待つ浜辺は風と波の音

康敏

(孤・た)

鉦太鼓獅子舞巡る江戸風情

堂哉

(そ・昇)

我が庭に小鳥訪れ初音きく

ゆたか

(た・び)

◎曾祖父になる辰年の御正月

正明

(孤・千)

◎春近しふくら雀の妊婦さん

百合子

(孤・け)

バス通り裏の山茶花美しく

規雄

(國・隆)

◎目鼻立ち奇妙がよろし福笑ひ

啓子

(孤・清)

出張は鯨鯨次第大洗

亜也

(千・堂)

一点

お見舞いの賀状嬉しや即礼状

紀久男

(盛)

除夜の夜救急の音に無事祈る

忠彦

(紀)

故郷(くに)遠く旅愁口ずさむ寒き夜

全

(紀)

日記買ふ船出は白紙から記す

孤舟

(健)

お伽噺を聴いてゐる炬燵猫

全

(堂)

金柳の先を結びて年迎ふ

五郎太

(康)

原稿に朱をまた加ふ寒の入り

全

(び)

妻と母の味重なるわが雑煮

全

(忠)

寒の水明るき方へ向きて飲む

とみ子

(紀)

雪しまき壊れし能登の家並かな

健介

(紀)

ゴロ市に美形の匙を見ついたり

千恵

(龍)

天災にも寒さにも耐えわが同胞(はらから)

恵洲

(孝)

大根を供えて旨し待乳山

ただしげ

(紀)

数え日にコールドムーン中天に

全

(龍)

日々替わる気温の変化や小夜時雨 　　ただしげ  
 買初に躊躇躊躇の定年後 　　正己（龍）  
 雪載せて特急雷鳥比良を背に 　　堂哉（け）  
 初歌舞伎仲見世抜けて蕎麦の店 　　ゆたか（忠）  
 初富士や遠く望めば七変化 　　全（規）  
 新年に心身立てんと経を読む 　　雅夫（國）  
 正月のかたづけ語る夫婦道 　　全（紀）  
 水浅く野火止沿いて枯れ葉踏み 　　國護（紀）  
 焼き芋の声聞かされてサンダルを 　　全（天）  
 寒波来る歩く姿も縮まりて 　　全（た）  
 辰年の地異に追はれし御慶かな 　　びん（盛）  
 元日や天人災の告げること 　　正明（百）  
 初夢や写真の父母に赤子いて 　　百合子（國）  
 初夢も壊れし能登の平家の地 　　啓子（紀）  
 初御空（はつみそら）バス通り裏思ひ出す 　　規雄（紀）  
 多聞寺はちよつと遠くて七福神 　　亜也（五）  
 喪中なり年玉代わりにお小遣い 　　天牛（た）



【句 評】

十点句 歳とへば手袋とつて指を出す とみ子

康敏さん・・・幼い子に「いくつ？」と聞くと。首からさげた毛糸のミトンの片方を脱ぎ、無言のまま指で答えた。

参考「年きけばちやんちやんこより指出して 長谷川双魚」

恵洲さん・・・かわいらしく、よくわかる句ですが、歳は齢の字が良いと思います。

堂哉さん・・・子供の仕草が目につかびます。可愛い！

隆さん・・・「札」は西洋人が失つて日本人に残る敬意の対象らしい。しかし近年日本人も失いつつあるように見える。

天牛さん・・・何本の指を出されたかわかりませんが、手袋では実感が湧かないでしょうね。口で云わぬところがいいですね。

老の賀の小さきお洒落冬帽子 盛雄

堂哉さん・・・年に関係なくお洒落を楽しみたいものです、どんな帽子かな？

ゆたかさん・・・老の身とお洒落な帽子の取り合わせが面白いです。

九点句 点となる鳥影染めて寒落暉 孤舟

とみ子さん・・・鮮やかに景が、目に浮かびます。

康敏さん・・・冬の夕焼けをバックに鳥が飛んで行く最後は点になって…。冬の夕焼けは山野に市街に余韻を残す。

三恵さん・・・寒落暉という季語を知ることができました。引き締まるような寒さに輝く夕日とそれに照らされた鳥影を「点」と表現された視覚的センスが好きです。

## 寒柝や顎まで浸かる仕舞風呂

康敏

孤舟選者・・・家族で最後の湯に浸かっていると寒柝の音が。火の元を十分確認して休もう。  
五郎太さん・・・芝居の一場面のよう。

恵洲さん・・・昔懐かしい一句。火の用心の拍子木も聞かれなくなって久しいですね。

允章さん・・・夜遅く仕舞風呂にゆったりと浸っていると、夜寒に打ち鳴らす拍子木の音が聞こえてくる。懐かしい昭和の景がよみがえる。

盛雄さん・・・夜回りの拍子木の音を聴きながら一日の疲れを癒す仕舞風呂。ご苦労さんでした。中七が良かった。

## 八点句

### 初釜やなかなか伸びぬ畳み皺

五郎太

とみ子さん・・・着物姿で、初釜に行かれた改まった雰囲気が、伝わりました。

恵洲さん・・・お茶の心得は全くありませんが、さもありません、と思われまます。

康敏さん・・・初釜のたけに取って置いた着物を箆笥から出すと、くつきり畳み皺が。アイロン掛けると正絹の生地が傷むし：色々と苦労されているご様子だ。

正明さん・・・偶のお茶会、皺が責めているようです。

亜也さん・・・品はよくても月並みな句になりがちな季語の世界に、あえて雑念を投げ込み軽みに転じた功。

### 能登の海荒れて元旦暮れゆけり

びん

孤舟選者・・・停電で暗闇の中で茫然としている人々にお構いなく夜は深まってゆく。

龍平さん・・・日本海の動きは何時も何かハツと感ぜてしまう我。今年は大事件が有るやも

昇さん・・・希望に満ちた楽しい元日が突然の大地震で一変。地元の惨状や悲痛の音が海荒れての措辞でよく分かります。頑張ってください！

規雄さん・・・能登半島の地震大変でした。しかもめでたい年の初めの夕暮れ時。胸が痛みます。

## 七点句

### つくばひの水の細さやひめつばき

孤舟

恵洲さん・・・蹲の細い水とひめつばきがよくハモっています。

康敏さん・・・茶庭に置かれた蹲、笥からの水は細い。歳時記では姫椿は山茶花の傍題。

本来、茶庭には花を觀賞する木は植えない。そのため作者はひめつばきを選んだのだろう。

亜弥さん・・・「細さ」への着眼がいい。

## 六点句

### 天金の頁ぱりつと初日記

とみ子

千恵さん・・・天金の日記とは豪華版ですね。たしかに開いたらぱりつ音がしそう。

孝岳さん・・・思い切つて購入した高級日記帳を使い始めるにあたり、天金の頁を「ぱりつと」開くことで年頭の決意の程が窺われます

啓子さん・・・今年初めて筆を入れる天金の日記。パリつと開く元日の頁。今年はそれを希望の音と捉えたい。

### 初芝居はねて老舗の酒で締む

千恵

孤舟選者・・・1月5日浅草演芸場での歌舞伎観劇後の一杯は最高。

ゆたかさん・・・同感です。私は酒の代わりに蕎麦で締めました

## 地異非情終末思ふ三が日

びん

百合子さん・・・元日の能登半島地震に始まり次々と起こる非情な出来事、例年の三が日とは異なる三が日でした。

亜也さん・・・進行中の災害で安易な論評が許されない中、「非情」の一語が作者の切実な思いを表して救いになっている。

紀久男・・・火山の多い地震列島に住んでいる我々。元旦に襲われまだ余震あり、地滑り（嘗て吟行した新潟市の拉致の浜の海寄りです）、海底隆起が富山・石川・福井の北陸三県にも広がっております。厳しい寒さの中、寒明けの春が待たれます。

## 初夢や静ひのなき星に住む

昇

孤舟選者・・・せめて初夢でもよいから、平和で安心して生きられ地球になつてほしい。

とみ子さん・・・初夢が叶いますようにと、祈りを込めて、いただきました。

正明さん・・・今回の佳作。ウクライナ、ガザの争いを見ると人間の性根が見えて来ます。

亜也さん・・・戦争、紛争、政争など多々ある悪しきことすべてを括弧に入れ、夢で裏返して歎じた巧みさ。

## あれやこれや越せぬ坂あり寝正月

盛雄

隆さん・・・「寝てゐては越せぬ坂」を持つてしまうこともある。

百合子さん・・・あまりに衝撃的な出来事から始まった正月、ぼつーと過ごしていた日常を思い返しながら思った心境でした。

## 五点句

リハビリの湯舟に浸かり初日富士

紀久男

とみ子さん・・・ご快復を、待ち望んでおります。

盛雄さん・・・長期の辛抱が肝心と言われるリハビリ。作者の心境が充分に伝わって来ます。

コントレイル

燃ゆるごと結露の筋や冬夕焼

啓子

健介さん・・・冬中悩まされる結露を美しいと肯定的に捉えられたことに感動。

## 四点句

月面に兎は居たか骨正月

健介

五郎太さん・・・無事着陸。このところ月が大きく、影もよく見える。

とみ子さん・・・月面探査機の着陸の報もあり、季語の取り合わせが、面白いと思いました。

千恵さん・・・世界第五番目の月面着陸、ちよつと誇らしいです。

蓮根に飾り包丁大みそか

千恵

恵洲さん・・・節料理に加えるちよつとした心遣い。亡母、亡妻の口に馴染んだ節料理が懐かしいです。

天牛さん・・・おせち料理用の酢蓮を丁寧に作っておられるのでしょうか。うまい！

深鍋に煮込むボルシチ雪の夜

康敏

恵洲さん・・・雪の降る夜は楽しい。ペチカ、の歌を思い出しました。ボルシチとペチカはロシアの冬でむずびつきます。

亜也さん・・・ボルシチはウクライナ発祥とか。併せてさまざま思いが浮かぶ。

天牛さん・・・雪の夜のボルシチを深い鍋で煮込む実感、すばらしいですね。美味でしょう。

我が生きる意味を問いつつ初風呂に

ゆたか

隆さん・・・一年に一度人生の意味を問う。その後のお屠蘇が答えかも。

初富士の龍神のごと海に立つ

昇

五郎太さん・・・干支にかけた大きな景。

山道の地蔵の頭残る雪

国護

ただしげさん・・・山道の傍らのお地蔵さん、頭に残る雪で、寒そうな感じを上手く詠んでいる。

津波跡廃市を覆ふ雪の空

びん

五郎太さん・・・廃市という捉え方がよいと思いました。  
堂哉さん・・・下五がなんとも辛いです。

隆さん・・・「降る雪や津波のあとの朝市場」ではいかが。視点を「廃市」へ。

去年今年棒に残りし深き痕

百合子

康敏さん・・・虚子の「去年今年貫く棒の如きもの」の本歌取り。棒の傷は地震か、事故か、裏金か。

隆さん・・・虚子の名句「去年今年貫く棒の如きもの」を伝えたら、意外や教育現場で教師が受験生を励ますときに受験生の受けがいらしい。県立高校長談。

啓子さん・・・なかなか出来ない本歌取りですね。消える痕もあるが決して消えない痕が深く刻まれてもいる。大晦日と元日の境目の、後悔と希望に揺れている時間。

### 三点句

年の豆噛みながら読む鬼平帳

とみ子

孤舟選者・・・「年の豆」は「鬼は外」。「鬼平犯科帳」とは「鬼」つながり。

浅草から巢立つ若手の初芝居

ただしげ

天牛さん・・・浅草の劇場の賑わいがまざまざと浮かんで来ます。

紀久男・・・松也・巳之助・隼人・米吉等若手等の澁漑とした芸は、伸び盛りで大いに期待されます。菊之助や獅童らもここでデビューし、鍛えられたものです。

凧上げる子等を見かけぬ野原かな

ただしげ

百合子さん・・・子供時代、正月に凧あげするのが楽しみな子供でした。凧に乗ってぐんぐん昇っていく凧、あの爽快感は忘れられません。野原が少なくなっただけのこともあるのでしょうか、最近は見かけなくなりましたね。

子も親も皆ちゃんちゃんこ昭和かな

正己

堂哉さん・・・確かにみんな綿入れを着ていましたね。昭和は遠くなりにけり。

百合子さん・・・今はフリース全盛時代ですが、昭和はちゃんちゃんこでした。私も母手製のちゃんちゃんこを着込んでぬくぬくしていました。

紀久男・・・昭和は遠くなりにけりです。小生も襦袢（どてら）着ることもなくなりました。

村恋し地蔵菩薩の赤頭巾

びん

ゆたかさん・・・田舎の田園風景が懐かしいです

元旦や若き雌鶏初たまご

百合子

盛雄さん・・・能登地震前の一句。“初たまご”がいいですな。今回の正月の佳作。

初寄席や積る憂きこと忘れつつ

盛雄

(桂米朝一門落語会)

孤舟選者・・・落語・漫才を見ていると、日頃の悩みや苦しみを忘れさせてくれる。

### 二点句

お目出とう云へぬ正月なると事故

忠彦

ゆたかさん・・・能登の皆様にお見舞い申し上げます。

木蓮の冬芽ふくらむ開基廟

くにお

ただしげさん・鎌倉の円覚寺でしょうか？ここにも春が近づいていると。  
百合子さん・胸塞がる出来事が多い中、この句には希望を感じました。天変地異はあっても  
季節が巡れば芽吹く生命・・・

初筑波万葉の歌碑かがよへり

くにお

亜也さん・・・「かがよふ」という万葉の言葉が効いている。  
正己さん・・・「かがよへり」という表現に風情がありますね。（こんなふうに見える（思える？））ことがうらやましい。）

花びら餅「良いお年を」と渡さるる

千恵

天牛さん・・・今年食べられなかったので羨ましい。  
紀久男・・・「さゝま」の花びら餅は最高です！甘辛両刀遣いの小生、芝居帰りの手土産に  
良く利用していました。

初日待つ浜辺は風と波の音

康敏

孤舟選者・・・大勢の人が浜辺で初日の出を固唾を呑んで見守る。  
ただしげさん・・・初日の出を待つ浜辺の静けさを上手く表現している。  
我が庭に小鳥訪れ初音きく

ゆたか

ただしげさん・・・此処でも、春がそこまで来ていることを感じさせる。

曾祖父になる辰年の御正月

正明

孤舟選者・・・高齢化時代とはいえ、少子化のもと曾孫に恵まれることは目出度い。

春近しふくら雀の妊婦さん

百合子

孤舟選者・・・「ふくら雀」は妊娠している訳ではないが、比喻が巧み。

目鼻立ち奇妙がよろし福笑ひ

啓子

孤舟選者・・・福笑いの顔立ちには美男・美女よりおかめ・ひよつとこの方が良い。

バス通り裏の山茶花美しく

規雄

隆さん・・・山茶花の当たり年でしょうか。一杯花をつけました。

「バス通り裏の山茶花赤々と」の方が良さそう。

※孤舟選者・・・下五「美しく」と直接的には詠まずに、俳句ではそれを感じさせる語句を考

えるべきです。

出張は鮫鱈次第大洗

亜也

千恵さん・・・限られた時期しか食せないものへの執着は良く分かります。

堂哉さん・・・大洗は鮫鱈で有名なですね！地方の祭に合わせたことがあったっけ。

一点句

お見舞いの賀状嬉しや即礼状

紀久男

盛雄さん・・・病氣見舞いでしょうか。年賀状も良い働きをするもの。

除夜の夜救急の音に無事祈る

忠彦

※康敏さん・「除夜の夜」と夜が重なっています。そして、下五の「無事祈る」は説明です。

作者の感情を表現せず、物を詠んでイメージを膨らませるのが俳句です。「除夜更けて近

づいてくる救急車」とか。参考「年越蕎麦待てばしきりに救急車 水原秋櫻子」

お伽噺を聴いてゐる炬燵猫

孤舟

堂哉さん・・・愚痴や説教なら猫も席を移すのかな？

金柳の先を結びて年迎ふ

五郎太

康敏さん・・・柳の枝を金色に塗った金柳は長くてふにやふにやして扱いにくい。逆にそこを上

手く利用して、お正月の生け花を仕上げた。

日々替わる気温の変化や小夜時雨 　ただしげ

龍平さん・・・何とも解らぬ予測不能の毎日 老いの身には堪えます

焼き芋の声聞かされてサンダルを 　國護

天牛さん・・・急がないと声が遠ざかって行く。靴なんか履く時間がない。良くわかります。

※康敏さん・・・「焼き芋の声」で、作者の耳にとどいているのが分かるので「聞かされて」は余計です。「焼き芋の声にサンダル突っ掛けて」では如何。

寒波来る歩く姿も縮まりて 　國護

ただしげさん・・・寒いと歩く姿勢も丸く縮こまってしまふ。よくある風景を面白く捉えている。

※康敏さん・・・動詞が三つもあります。散文的になります。「一句一動詞」を目指すべきです。併せて、寒波が来るから体が縮まるは原因と結果です。原因結果は理屈であって、詩ではないと言われます。

※この注意は孤舟選者も注意事項としてよく指摘されます。(編集子)

元日や天人災の告げること 　正明

百合子さん・・・元日の地震で日本には多くの断層帯があること改めて認識、天災人災を

明日はわが身としなければと思いました

多聞寺はちよつと遠くて七福神 　亜也

五郎太さん・・・隅田川の辺りでしょうか。正月の風情を感じます。

喪中なり年玉代わりにお小遣い 　天牛

ただしげさん・・・喪中でも年玉を待っている。年玉を渡す人の気持ち、よく分る。

## ※2024年初句会に寄せて

びんさん・・・今回は新たな年を迎えての選句でしたので、いつもより全体をじっくり見て丁寧を選句をしました。そうした中で、気が付いたことがありました。

全88出句の中で、五七五の正調から外れた投句を拾い出してみたところ、中七の字余りだけで五句ありました。(上句の字余りは許容範囲内と認識しています)。その字余りの例を並べてみますと、これらはいずれも句意・句感を大きく損なわずに五七五の作句が可能ではないかと思えるものでした。これまで些か気になりながらも数えたことも無かったので、幾分驚きました。

日本の詩は俳句・短歌・自由詩のいずれかに分別されるものと思います。青葉会としては、このうちの俳句に深いご縁があつて立ち上げたものと理解しています。その立上げの時期からして既に句会も四五三回という年月(ひと月に一度の句会があつたと想定すれば88年になろうとしている)を熱意をもって過ごしてきた伝統からしても、いま一度 五七五の正調に立ち返ってみる時と考える者ですが、如何でしょうか。



## 【次回および次々回 青葉会】に注意!! 次回2月句会は第五木曜日29日です!

2024年2月29日(木) 13時より青葉会句会

於：世田谷区三軒茶屋 世田谷区施設

参加者は出句5句。ご投句の方は2句、を目処としてご提出ください。

2月27日(火)中、編集の星田啓子までお送りください。

※今年は今月2月と、3月がイレギュラーな日程となります。3月は第三週の木曜日21日です。向後決まっている句会日程一覽を添付致しましたので、ご確認くださいませようお願いします。



## 【青葉会報】

一、 令和六年青葉会初句会は、冒頭ご出席者をご覧いただくとお分かりのように、十名での丸紅本社4階会議室を借りての句会となりました。ほほ例月ご出席の方々にてゆつたりとした選句会となったようです。(句会には毎回でなくともご都合のつく方には是非ともご参加いただきたく、よしんばそれが一年に一度のことでも、大歓迎です。作句された方々との様々な想いや日常のお暮らしのことなど、非日常かもしれないひと時を語り合いお過ごしくださることを念願しております。)

その後は初句会ということもあり、急遽、竹橋毎日新聞社ビルの赤坂飯店にて新年会となりました。句会結果はご覧のように、とみ子さん、盛雄さん、孤舟選者、康敏さん、五郎太さん、びんさんが高得点でした。

今年元日の夕方、里帰りして最もゆつたりした時間に 国としても想定外とも云われる深度7を計測した能登半島地震が発生しました。ご親戚或いは知人など居るいないにかかわらず、皆さまに於かれてもどれほどに心を痛めておられるか、この青葉会句会場でも多く語られたことと存じますが、ご出句にもこの災害現場へ心を寄せられる句が多く、選句にもその分現地を慮るお気持ちが見られる結果ともなっております。茲に改めて被災された皆さまに心からお見舞い申し上げる次第です。

### 二、孤舟選者 近詠

裂帛のこゑ白鳥の諍へり

寒暁や生みたて卵こつと割る

鬢付の匂ふ都電や初相撲

俣屋の意気軒昂や寒四郎

阿吽の呼吸鷹匠は鷹放つ

### 三、関係者近詠

心技体競う土俵の淑気かな

盛雄

散切りの力士頼もし正月場所

全

・丸紅社友会「新春企画 年男・年女からの便り」に

青葉会

紀久男さん、孤舟さん、恵洲さんのお三方の便りが掲載されて龍平さんからの一句・・・

新春を青葉ニ役キツクオフ

龍平

※今回の関係者近詠には、珍しい方がご登場です。今後は時に選句などのメールやり取りでいただく句をお仲間の近況としてお届けしてまいりたく存じます。

四、「森の座」「きさらぎ」関係者近詠はお休みさせていただきます。

令和六年二月吉日

(了)